

# ヨセフ・オス 試論

相 沢 文 蔵

まえがき

一、ヨセフ・オスの生涯と著作

二、祭司貴族としてのヨセフ・オス

三、ヨセフ・オスにおける演説様式

あとがき

まえがき

51

ユダヤが世界帝国ローマと戦い、実質的亡国を招いたかのユダヤ戦争（A.D. 66—70）はその民族の長い歴史を通して、最も大きな段階を劃する事件であった。而してこれに前後する期間はキリスト教側から見ても極めて重要な一時期をなしている。このユダヤ民族史における激動期に生きたユダヤ人歴史家ヨセフ・オスの一連の著作はユダヤ史のみならず、キリスト教初期の時代環境を知るための欠くべからざる根本史料となっている。従って新約聖書の背景に照明を

与えるサイドライトとしての価値は大きく、古くから親しまれて来たところである。併し、その著書の原文批評と共に彼自身が近代的学問の対象としてとりあげられるに至ったのは最近数十年來のことに属する。そして彼の生涯を通じて見られた極めて特異な動きは彼をして祖国を敵ローマに売渡し、自らの保全を計った奸悪極る人物として解せしめ、古來同胞ユダヤ人の容るゝところとならず、彼とその一連の著書には正当な理解と評価がなされて来たとは云い難いものがある。

これに反して彼の著書はクリスト教会において珍重され、愛読され、その原文もクリスト教側によつて保存されて来たのであり、云わゞ、それはクリスト教徒対ユダヤ人という抜くべからざる深い感情的対立を背景として今日に伝えられて来たことが出来る。かくてこれら双方の側における彼とその著書に対する理解と評価において、いづれの側にもなにかの先入主や一方的感情の混入を免れ得ないのが普通であつた。これらは共にヨセフォスを正當に理解し、解釈する態度ではない。その本質を理解するためには矢張り彼の所屬した身分、即ち當時の複雑な性格をもつたユダヤ祭司貴族の実態的把握が前提となるであらう。これが明かにされて始めて彼の特異にして誤解されることが多い行動とその著書の内容とに一の方向づけが与えられると考えるのである。その著書が史料として駆使されるためにはこの作業が必要なる前提となるであらう。

彼は他の多くの古代史家の手法にならない、本文中に屢々重要人物をして演説を語らしめて叙述の効果をあげんとするが、その内容には彼自身の見解や立場を集約的に盛りあげているものがある。この演説の代表的なものを吟味することにより、彼自身の立場が明かにされる点が多い。本稿はこの様な観点に立つてヨセフォスの属した祭司貴族の実態を把握し、次いで代表的な演説の内容の中に彼が表白している彼自身の立場をあとづけんとした試みである。この際、ヨセフォスの具体的な動きをまとめるのは省略し得ないことと思われるので、その生涯を最初に要約してみた。

史料として使用されるヨセフォスの著書は次の如きものである。

ユダヤ古記 (Antiquitates Judaicae—Ant.と省略) / ユダヤ戦記 (Bellum Judaicum—Bell.と省略) / 自伝 (Vita) / アピオン駁論 (Contra Apionem—Apion.と省略)。

### 一、ヨセフォスの生涯と著作

ヨセフォスの生涯について知るには彼の一連の著書によるほかはない。彼の自伝はこのためには欠くべからざる史料とはなるが、これはその内容において殆どユダヤ戦争直前における彼の腰昧にして誤解を招く出処進退の弁明であつてられ、その冒頭に申訳程度に彼の出自について語るのみで、自伝の体をなしたものは云い難い。彼の伝えるところに従うと、ローマ皇帝ガイウス(カリギュラ)の即位の年<sup>①</sup>(A.D. 37年)、往年のユダヤ民族のあつい讃仰をあつめたハスモン王統の血を母方にうけ、由緒正しい祭司の家に生れたという。その身分は祭司の上層にあつたことがこれを以てうかがわれる。

この頃のユダヤはローマ属州たること既に三十年余、福音書にもその名を知られるローマ総督ポンティウス・ピラトスは十年にわたる長い任期を終つて後任者と交替してローマに引揚げた時期にあたつた。新帝カリギュラは即位に際し、彼の像をイエルサレム神殿の神域に建て、帝威のあまねきを誇示せんとした。<sup>②</sup>さなきだに異教ローマの支配に過敏であつたユダヤ人をこれによって大いに挑発し、かくて騒擾がおこり、大事に至らんとしたが、この帝の急死によつて此挙は撤回され、事件は落着を見た。この種の反ローマ的な動きはヘロデ王の死からローマ属州への改編の行われた頃相ついで行われ、<sup>③</sup>その都度ローマの弾圧によつてつぶされるが、その後も絶えることなく、時に応じて散発を見ていたのであつた。この様な時代の雰囲気の中で祭司貴族の男子として成長し、当時のぞみ得る最高のヘブル的教

養を身につけたが、既に幼にして早熟の神童ぶりを發揮し、學識のほまれ高い學者達も彼について律法解釈に関する意見をたゞしたと自ら誇っている。彼は當時のユダヤ教の三宗派団体たるパリサイ、サドカイ、エッセネの教義を次々に極め、更に荒野の隱遁者バヌスの門に入って身神をきたえて歸えり、その後はパリサイの教義に従つて身を持した<sup>④</sup>という。併し、この一句のみを以て彼をパリサイの徒と規定し、又彼の幅の広い著作の中にパリサイに対する好意的傾向を指摘してその論拠とするが如きは當を得たものとすることは出来ない。彼の本質は彼のとつた具体的行動やそれを支えた意識内容を検討した上で規定されなければならぬ。

彼は次にその後半生の方向を決定づけたところの重要な一事件について伝える。それは彼の二六才の頃（A.D. 64年）、國民使節の如き資格を以てローマに派遣された事であつた。その目的はネロ帝の許に判決を仰ぐべくローマに送致されていたユダヤ祭司達の釈放運動を行うことであつた。彼は二ケ年のローマ滞在中、伝手を求めてネロ宮廷に出入りし、遂にその目的を達することが出来た。宮廷関係者の間を遊泳する外交手腕には凡ならざるものがあつたが、このローマ行は彼のローマ觀を確立せしめるものとして役立つこと多大なものがあつた。彼はローマ屬州民たる弱小ユダヤ人の代表としての鋭敏なる觀察眼を以てローマ帝國の実体をつぶさに各面にわたつて洞察するところがあり、又若干の知己をも作つて帰国したのであつた。その時彼が最初に見たものは反ローマ的な騷擾が続発せんとする祖国の危機であつた。狂信的なメシア希望の信仰に立つ反ローマ主義者の一団熱心党<sup>ゼーロロダイ</sup>は暴力を以て主動權を握りつゝあり、民衆一般を率い、出先のローマ軍隊と衝突をくりかえす如き緊迫した情勢であつた。ローマ屬州という現狀に安住する祭司貴族は衆議所<sup>⑤</sup>に拠つて或る程度の自治体制を許されていたが、その主動權は熱心党的暴力に奪われつゝあつたのである。事実、代々のローマ総督や駐留軍による暴政や惡徳に対するユダヤ人一般の反感は累積し、これに対する抵抗も散発を見たが、その度毎に彈圧は苛烈となり、熱心党的抵抗も次第に潜行的たらざるを得なくなつていた。総

督アルビヌス(62―64)、フロルス(64―66)の任期中には凶器<sup>シカカ</sup>を懷中に忍ばせた暗殺団<sup>シカリオイ</sup>として暗躍し、出先のローマ官憲のみならず、親ローマ的なユダヤ上層部を殺害していた。

祭司貴族達は新帰朝者ヨセフォスを先頭にしてこれら狂信的な反ローマ主義者達の宥和にあたり、彼はローマ支配下における世界状勢を説き、いかなる抵抗も空しいことを説得につとめるが、効を奏せず、これを繰りかえすうちに却って彼等の激しい憎悪のまことにされ、はては一身上の危険さえも感ぜられる程であったと彼は述べている。熱心党的<sup>ゼーローダイ</sup>暴力に対抗する力をもたない祭司貴族の中にはイエルサレムをのがれて身の保全をはかる者もあったが、上層部に属した彼はそれもなく、結局当分は熱心党<sup>ゼーローダイ</sup>主戦論者との妥協もやむを得ぬものと諦め、大勢に流されるまゝに暫く情勢を見、ローマとの和平の機をとらえんと考えるに至った。この様な行き方は彼のみならず、時の祭司貴族に通ずるものであり、衆議所もやむなくこれに同調せざるを得なかった。この様なユダヤ戦争の始まる直前の緊迫した空気は時の総督フロルスの挑発的行為によって破られたが、この叛乱勃発に至るまでの形勢についてはヨセフォスは詳細に伝えている。

フロルスは当時のローマの悪地方官の典型ともいべく、その在任中は貪慾にみちた悪政の連続であった。総督の駐在地カイサレアは東方各地に見られたギリシヤ人对ユダヤ人の反目抗争の嵐の中心であったが、フロルスにとってはこの対立より生ずる紛争も私腹を肥やすための好機であった。事態を收拾するどころか、却ってその拡大につとめる有様で、事を構えてイエルサレムに兵力を以て乗りこみ、市民の財物を掠め、はては神殿の財庫をうかうか如き行為を敢てするに至った。<sup>①</sup>狂信的な反ローマ派にとってはこの不法なる地方官に対して正式に武器を手に蜂起すべき大義名分は十分そろったのである。彼等は市内のローマ勢力に襲いかゝり、その軍営を襲う如き本格的攻撃を開演した。これがユダヤ戦争の開始となった事件であるが、ユダヤ祭司貴族達にとってはこの抵抗の先に来るべきものは十

分予想し得たところであり、かくて百方手をつくして事態をくいとめんとしたが及ばず、フルロスはシリアにあるローマ軍に出動を依頼し、祭司貴族も亦これに同調せざるを得なくなつた。この様な騒然たる事態の中にヘロデ王家につながるアグリッパ<sup>⑫</sup>はイエルサレムに來り、抗戦にいきりたつ市民に対し、宥和説得の大演説を行い、ユダヤ人の歴史から説きおこし、当面の世界情勢に説き及び、武器を捨てんことを説いた。この演説はヨセフォスの全著作中であつて一きわ精彩を放つもので、彼の一傑作たるを失わない。この演説の内容とその意義については後節において改めて考察することにした。

ユダヤ上層部も望みをかけたシリア総督ケステイウスは一ヶ軍団の兵力を率い、反ローマ的叛徒の抵抗をつぶしながらイエルサレムに向つて進攻し來つたが、頑強なる抵抗は彼も意外とするところで、攻城機材をもたない彼はイエルサレム攻撃をためらう間、ユダヤ史に輝く古戦場ベテホロンの隘路<sup>⑬</sup>において機をうかゞつていた叛乱軍のゲリラに、虚をつかれて敗走し、このローマ第十二軍団はその汚辱を長く負うことになった。この夢の如き大勝は狂信的なメシア思想をよりどころとする彼等にとっては神意彼等にくみし給う証拠と見えたのであり、その狂熱はいやましに昂揚するのみとなった。

この緒戦のはからざる勝利も実は後の悲劇の予報に過ぎなかつた。ローマ当局にとっては属州におけるこのローマ軍の敗北、ユダヤ如き弱小民による叛乱の成功は單なる地方的事件として看過し得ない事情にあつた。ユダヤにおけるこの叛乱は隣接諸地方にも波及する危険は十分にあつたのである。ネロ帝はその面目にかけてもこの叛乱の鎮圧を決意したのも当然のところであつた。かくて老将ウエスパシアヌス(後の皇帝)をしてユダヤ遠征を行わせることゝなつた。ケステイウスの敗走は六六年秋のことであるが、ローマの本格的討伐の始まる翌年春までの半年間のヨセフォスの行動については、彼の自伝において詳細に述べている。併し、戦記においては簡單にふれてゐるにとゞまり、しか

も両者の食い違いさえも見え、曖昧さを残している。

戦記にあっては彼を始めとするユダヤ上層部はローマとの和平を終始熱望しながらも、狂熱的な主戦論者に圧倒され、ローマ遠征軍と対決せざるを得ない窮地に追いこまれ、やむなく対戦準備に腐心することになった。その一つとしてユダヤ領内は六ヶの軍管区に分けられ、募兵がなされ、軍指揮官の任命も行われた。ローマを知ること深いヨセフオスはローマを迎撃する第一線たるガリラヤ地方の軍事の責任者たる任命を受けた。<sup>14</sup> かくの如く戦記にあっては彼は当時からガリラヤ地方の防衛責任者として現れてくる。

自伝においてはこれと異り、ユダヤ上層部に命ぜられて彼は、ガリラヤ地方に派遣され、その地方でよき装備をもった叛乱者達が対ローマ戦にそなえているのに対し武器を棄て、抵抗をやめる様勧告したとするのである。即ち過激な主戦論者達を宥和説得して対ローマ戦を未然に防止せんとした点を強調し、戦争における責任ある地位についたことには何等ふれていない。この自伝は彼の代表的大作であるユダヤ古記の附録として公にされたもので自己弁護の動機を多分にもっている。ユダヤ戦争が終った後、彼はローマにあって敗残の同胞と全く違った生活に入り、皇帝一家の厚い思顧を加えられることになった。これを見たユダヤ系文人達は彼こそユダヤ戦争の責任者の一人であり、戦犯なりと断ずる文書を盛んに公にしたことは彼自身大いに氣にかけたところであり、これに対する自己弁護の書としてこの自伝が書かれたのであった。この書において彼の強調するところは、彼がガリラヤにおける軍事的責任者に任命される以前、自伝に描かれた如き和平主義者としての努力がなされた事にあり、云わば、戦記における記述の欠けた点を補足するものとして書いたとするのである。彼は戦争責任者としてローマ軍と戦った事はまぎれもない事実であり、而してそれは彼本来の意図でないにしても、和平主義者としての行動が甚だ一貫性を欠き、その真意は把握し難いものがある。彼自身、自らの行動について自己弁護せんとするあまり、記事の混乱が生じ、却って誤解を招く

ことゝもなったのである。

ともあれ、六七年プロトレマイスを発したウエスパシアヌス軍は一挙にこの叛乱好きのユダヤを打倒すべく南下を開始した。ユダヤ上層部の和平論者の望はこれによってたち切られ、やむを得ず、戦時体勢をいよく強化せざるを得ぬ立場に追いこまれるに至った。彼は来襲したローマ軍を前にしてなおも和平への望を捨てなかった如くであり、又ローマとユダヤの橋渡しをなし得る人物ありとせば、彼においては他に見出し得ないことも知っていた。ガリラヤの各都市のローマに対する態度においても一致を欠き、対ローマ抗戦の気分が盛り上ったわけでもなかった。ガリラヤ各地は各個に撃破され、ローマ軍はヨセフオスが手兵を率いて守備するヨタパタの町に襲来した。この町は四七日の籠城の末陥落を見たが、彼は少数の部下と共に落ちのび、追手せまるや部下達は虜囚の恥辱を受けるよりはと次々に自決をはかった中に彼ひとり生き残り、ローマ軍中であつた彼のローマ滞在中の知己の執成もあり、降伏の機をつかむことが出来た。彼は遠征軍司令官ウエスパシアヌスの許に引立てられるが、この際、神より遣された預言者氣取りで預言を行うのである。その内容は「ウエスパシアヌス及ティトスはネロ帝の後継者として間もなく帝位につくべし」とするにあつた。ウエスパシアヌスはこれを以て捕虜となつたこのユダヤ叛乱軍の責任者の助命を願う奸策なりと考えたが、取調べのうちにヨセフオスにおける本来の親ローマ的立場を理解し、こゝにその助命が実現した。<sup>(17)</sup>このヨセフオスの即位預言は決して一時のがれの根拠のないものではなく、彼においては相当早くから準備されていたと見ることが出来る。彼がローマに滞在中ネロ宮廷に出入りしているうちにその治世の行末を見てとっていたとしてよい。ネロの治世の終り頃は恐怖政治と化し、彼を打倒せんとする陰謀も企てられて居り、早晚何等かの政治的変動なかるべからざる時代の徴候を見抜いていたことは充分考えられるところである。又当時のローマにおいては東方よりローマの支配者出現せんとする俗信も広く行われていたのであり、<sup>(18)</sup>東方遠征中のウエスパシアヌスを以てこれにあてるとしても決



して唐突の感を与えるものではなかった。

かくてヨセフオスは捕虜としてローマ軍中であつたが、ローマ軍は引続き四散した叛乱者の掃蕩を続け、六七年末頃までにはガリラヤ一帯の平定を見た。一方叛乱者の一部はイエルサレムに遁入して同志勢力を結集し、親ローマ的傾向ありと見られる祭司身分に対し次々と血の粛清を加え、彼等による恐怖政治の体制を以てローマ遠征軍を迎撃すべく、一切をあげてその準備に狂奔した。六七年の冬をカイサレアの冬営に送つたローマ軍は翌年春三ヶ軍団の兵力をもつて行動を開始してイルサエム包囲圈をちぎめ、これに接近し來つた。しかるにこの年六月ネロ帝の死が報ぜられ、これに続いた政治的変動は一時イエルサレム攻撃の鋒先を停滯せしめたが、この間にウエスパシアヌスは部下軍隊に擁立され、帝位につくべきを宣言した。<sup>(1)</sup>これはアレクサンドリアにおいて行われたが、ヨセフオスも従つてこの地に赴き、こゝで多少ともギリシヤ的教養を身につける機会があつたことゝ思われる。ヨセフオスの即位預言はかくてたがうことなく実現を見たのであり、ウエスパシアヌスは帝位につくべくローマに去つた。そのあと遠征軍の指揮は子ティトスに引継がれるが、この際ヨセフオスは捕虜の身柄を解放され、ティトスの帷幕にあつて奉仕することゝなり、利用価値の大きいことから次第に重用されることになるのである。即ち、彼は捕われるユダヤ人捕虜の取調べや通訳業務、叛乱軍に対する降伏勧告等の情報勤務にあたり、ローマ軍による祖国の滅亡を早めるために奉仕する結果となつたのであつた。彼自身記すところに従えば、彼は一度ならずイエルサレム城壁に接近し、城内の叛乱者達に向い、抗戦の愚を説き、降伏を勧告したが、祖国を敵に売り同胞を裏切つた者としてあらゆる惡罵と投石や弓矢を以て報いられたのみで、そのため負傷し、意識を失つたこともあつたといふ。<sup>(2)</sup>ヨセフオスが詳細に伝えているこの降伏勧告演説は彼が伝えるまゝの形式をもつて行われたとは到底考えられず、戦記を著作した際の机上の製作として見なければならぬ。併し、彼自身の立場と見解が余すところなく表白されて居り、この点大きな意義をもつ。前述のア

グリッパ演説とあわせて後に考察したい。

一方籠城する抗戦軍の抵抗は意外に激しく、ローマ遠征軍の予期に反して包囲は長びくにつれ、ヨセフオスに対する軍司令官ティトスの信頼にも拘らず、ローマ軍中には彼が城内の抗戦軍に内通しているにあらざるやとの疑惑の眼をむける者あり、はては彼に対する処刑の要求すら出されることもあった<sup>②①</sup>。城内の抗戦派においても主動権争いによる内訌や食糧不足等の悪条件は積るのみで遂に力尽きてローマ遠征軍の入城を許し、七〇年九月陥落、城内はローマ軍の掠奪にまかされ、神殿は焼き打ちされ、このユダヤ教の拠点は永久に失われることとなる。ユダヤ人の開戦からの犠牲者の数は死者一一〇万にのぼり、捕虜も九万にのぼった<sup>②②</sup>とヨセフオスは伝えるが、これは彼における数字的誇張の一例である。併し、莫大の量の戦利品と多数の捕虜を以て勝利を飾ったことはこの戦勝記念たるティトス凱旋門の彫刻<sup>②③</sup>に示される通りである。凱旋將軍ティトスは既に皇帝として父ウエスパシアヌスの君臨するローマに帰京し、かくてこのフラウイウス王家の栄光はいやましに加わることとなった。

何よりも先ずティトスの凱旋式が行われ、その行進する行列にはユダヤ人捕虜もひかれ行ったのであり、ティトスと共にローマ入りをしたヨセフオスはこれを目のあたり実見している筈である。又戦勝記念としてティトスの治世中に着手された凱旋門や半円劇場<sup>②④</sup>（所謂コロッセウム）の工事にあたっても同胞捕虜が奴隷として相当数使役されるのも見ている筈である。併し、彼はこれらに關しては一言も語らうとしないのである。亡国と神殿の壊滅という同胞民族の運命と彼個人の置かれた境遇は今やあまりにも隔絶したのであり、これらについてふれるに忍びないものがあつたにせよ、彼としてはその個人的投降から祖国の滅亡、しかもこの際におけるローマ軍への協力を通して祖国と同胞民族から自らを疎外せざるを得ず、あらゆる個人的感慨を超克しなければならなかった。時の世界情勢に一応通じていた彼はローマに対する熱心党的抵抗の空しいことは始めから予見出来たところであり、その狂信と狂熱に民族全体

が巻きこまれるのを阻止せんとしてそれが出来なかつた以上、彼としては自らのローマへの降伏という行為を正当化すべき理由をもつていたのであった。今後のヨセフオスの中に民族の粹をこえたヘレニストユダヤ人の典型的な姿を見ることが出来るのも当然のことである。

ともあれ、かの即位預言の適中から、戦争を通じて協力したその功績は充分このフラウイス王家の恩顧を蒙るに値したのであり、彼はこの一家の解放奴隷たる身分において、この王家の家名を名のり、ヨセフオス・フラウイスと称することゝなつた。このユダヤとローマに二股かけた名前こそ彼のローマにおける後半生の本質をはからずも明示するものであつた。彼はウエスパシアヌスの私邸内に居住し、ローマ市民権を与えられ、年金と土地をも下賜された。ローマ当局者にとつてヨセフオスの利用価値は戦争終結を以て消滅したわけではない。ユダヤ民族は早くからオリエント一帯各地に広く居住し、しかもそれらすべてが共通の神信仰を以て結ばれ、その横の団結の強さを以て実質的には一大勢力をなしていた。ユダヤ戦争は一応終つたにしても東方各地におけるユダヤ人を中心とする反ローマ的叛乱の危機は依然感ぜられていた。特にメソポタミア地方にはローマを脅威する勢力は絶えることなく、而して又この地方にはユダヤ人居住者特に多く、ユダヤ戦争に際しては抗戦者達はこの地方のユダヤ人からの援助を強く期待していたのであつた。

ローマ当局者はこれら東辺の騒乱好きの辺境民に対してユダヤ戦争についての宣伝活動の必要を痛感していた。ローマに対する如何なる抵抗も無効に終るべきことは、五ヶ年にわたつて頑強に抵抗を続けたユダヤ戦争において実証されたのであり、この戦争について伝える人物として、その経歴から見てヨセフオス以上の適格者は他に得られなかつた。かくて彼の文筆による新しい協力活動が始ることゝなるのである。ローマ当局者のこの方針にそつて、当時のユダヤ人の常用語たるアラム語による「ユダヤ戦記」<sup>(26)</sup>はヨセフオスによって倉皇のうちに仕上げられ、東方各地に流

布せしめられたという。この原文は伝って居らず、細い内容については知られないが、宣伝的要素を多分にもつていたことは間違いないところである。このローマ当局による宣伝戦は効を奏したかどうか。かゝる文書戦は期待する如き効果を發揮出来たとは考えられぬ。多少後にはなるが二世紀に入り、トラヤヌス帝からハドリアヌス帝の時にかけ、東方においてユダヤ人を主とした広汎な反ローマ的騒乱がくりかえされたことがこの際想起されねばならぬ。このアラム語による本来の「ユダヤ戦記」について現存のギリシヤ語によるものが公にされた。これは前者の単なる翻訳ではないことはギリシヤ文学に堪能な助手の執筆になる部分も見られることから察せられるが、これがなされた動機について彼自ら記すところに従えば、この戦争終了後、この戦争に關係した文書が続出したが、それらはいづれもローマに対する迎合とユダヤに対する憎惡を以て書かれて居り、真相をまげること多いのを見、彼はユダヤ戦争について執筆すべき最適任者たるの自負を以て、ローマ市民に事実を提供するとして成ったものであった。彼は宮廷の恩顧のもとにその生活は安定を見、ギリシヤ的教養も多少は身につけたであろう。併し、何よりも重要な事は、この戦争に關するローマ政府側の公文書を資料として自由に使用出来る地位にあった事が考えられねばならぬ。その著書の内容がローマ側から見たユダヤ戦争に終っているのは彼の親ローマ的立場以上にその使用した資料の性質に依るところが多い。これは七卷より成り、始めの二卷半ばまでは序章にあたる部分で、ハスモン王家をへてヘロデ王時代と、次第にローマ勢力下におさめられる過程を描き、これに対する抵抗、そしてユダヤ戦争への突入からその終結までの詳細なる経過がのべられている。これが完成した時（七五〜七九年頃）宮廷においても嘉納され、一般に公布すべきを命ぜられ、この戦争の關係者達もその内容の真实性を保証したと自ら誇っている。かくて天晴ローマ御用史家として再登場したのであった。ウエスバシアヌスに次いでティトス帝の治世に入っても彼に与えられた恩顧に変わることなく、次のドミティアヌス帝の時にもその寵は衰えず、その所有地には免税の特権さえも与えられる有様であった。こ

の帝は文学を解すること薄く、その酷薄なる治世にあって見識ある文人達は筆を折って沈黙を守った中に彼は量においてその代表作たるユダヤ古記を公にした。これは九三—九四年頃のことである。

この「ユダヤ古記」は二十巻に及ぶ大作であるが、その前半は云わゞ旧約聖書の要約である。而してその内容をギリシヤローマの文人達に理解せしむべく変容を加えた点多く、ヘレニズムとヘブライズムの奇妙なる混濁が諸処に見られる。但し後半は史料的价值の高い部分を含み、ハスモン家の歴史からローマとの交渉、ヘロデ王時代をへてユダヤがローマ属州に改編されるまでの過程、これに対して執拗にくりかえされる民族主義的抵抗、そして最後はユダヤ戦争への突入に至るまでの経過を彼の立場、即ち後述する如きローマ権力との結びつきによって特権を維持し得た祭司貴族の立場において書かれている。ユダヤ戦記と平行する記述も多いが、同一記述の重複は避けて居り、批判的に使用すればその史料的价值は「ユダヤ戦記」同様頗る大きいものがある。この附録として彼の一身上の弁護に集めた「自伝」が追加された。彼はその晩年更に「アピオン駁論」を公にしたが、これは小著ながら彼の一連の著書中最も弁証的且論争的でそれだけ精彩を放っている。アレクサンドリアのギリシヤ人哲学者アピオンは又反セミティズムの代表者として著名であり、ヘブライズムに対して露骨なる攻撃と非難を浴せかけていたが、ヨセフオスはこれを受けてたち、白熱的な論駁が展開され、かくて反ヘレニズム文献の代表的なものを残すことゝなった。その内容とするところは、ギリシヤに比してユダヤは古さの点において又文化の高さにおいて決して劣るものでない事、その哲学においてはユダヤはギリシヤの模範となっている事を論証し、従来加えられてきた中傷と誹謗に対し一々論駁し、最後にユダヤ教の讚美を以て終っている。その論法において牽強附会を免れないが、立論をなすにあたって博引傍証を極め、かくて埋滅して伝らない古代文献からの引用が夥しく見られることから貴重な価値をもっている。

総じて彼の著作を通して見られる欠点として弁護的要素強く、従つて又極めて傾向的である点が指摘されねばならぬ。小は彼自身の行動を正当化するための自己弁護から、大は彼の属する民族の歴史や宗教文化等あらゆる面でギリシヤのそれに劣るものでない事、又世界帝国ローマを相手に数年間かくも英雄的抵抗を試みたユダヤの決して微少にして侮るべき存在にあらざる所以等にわたり弁護的論証に終始しているのである。彼自身、これらの著作活動を行うに際し、ユダヤ同胞を代弁するとの意識は十分もつていたに拘らず、彼の祖国の危機に際して選んだ行為はいさゝかの共感をも呼び起すことなく、その真意は理解されることなく、而して又その一連の著書は無視又は蔑視を以て遇され、その評価の冷酷さは変ることなく続いてきたのであった。併し、彼自身の全く予期しない、むしろ彼自身は生存中激しい敵意を懷いていたに違いない方向において彼の著書は尊重され、愛読を得ることとなるのである。それはユダヤ教に袂別して独特の宗教的自覚に立つに至つたクリスト教徒においてとであつた。既に初代教会において彼の著書は聖書の背景に照明を与える貴重な文献として珍重され、その著書の分量も多いことから彼は第二のリウィウスと<sup>③⑤</sup>呼ばれた程であつた。クリスト教徒による愛読は度をこし、ヨセフォスの原文の中に彼等による恣意な挿入までも加えられるに至るが、今日までその原文が伝えられて来たのは専らクリスト教側において読み継がれて来た故にほかならぬ。この点、かの第一のリウィウスの著書はその大部が埋滅しているのに比して、ヨセフォスの場合誠に恵まれた史家の感が深い。ヨセフォスは彼が絶えず念頭においたところの同胞には容れられることなく、却つて彼自身予期しなかつた方向に迎えられた事は、かのクリスト教における最も大きな名が同胞によつて迎えられることなく、かくて異邦人のものとなつて行つたのと軌を一しくするものであつた。

## 【註】

- ① *Vita* 4f.
- ② *Bell.* II 184.
- ③ この頃の反ローマ的叛乱については拙稿「熱心党をめぐる二三の問題」人文社会第2号（一九五一）
- ④ *Vita* 8—12
- ⑤ G. Holscher, "Josephus" in Pauly, RE. Bd. IX S. 1936
- ⑥ *Vita*. 13—16
- ⑦ 前掲拙稿
- ⑧ イスラエル古制、祭司貴族を主とする七一名の代表によって構成された統治機関でその権限は本来広汎にわたった。大祭司はこの議長を兼ね、対外的には人民を代表し、徴税を行い、裁判権も行使した。ヘロデ王はこれを全く骨抜きにしたが属州化と共にその権限は多少回復された。
- ⑨ *Bell.* II 254ff.
- ⑩ *Vita* 20
- ⑪ *Bell.* II 277ff.
- ⑫ ヘロデ王の孫、父はヘロデアグリッパ、ローマ勢力との関係よく四九年叔父の後継者として小王国カルキスの王に任命される。同時にイエルサレム神殿の大祭司任命権をも与えられ、ユダヤ戦争開始の頃までその権限を行使した。ネロ帝の信任あつく、領地の加増をかさねバレア、ガリラヤの一部をも統治した。新約聖書においては行伝25:13を参照。その行動は終

始ローマ代弁者としてのそれである。

- ⑬ イエルサレムより西海岸へ出る街道上の險要の地、古来数回勝利にかがやく古戦場、ヨシユア記10:10その他、近くはハスモン家独立の際シリア軍を破った。マカベア第一、324—
- ⑭ *Bell.* II 562ff.
- ⑮ *Vita* 77
- ⑯ *ibid.* 375ff.
- ⑰ エタパタの町の籠城から捕虜となる経緯は*Bell.* III 149—408
- ⑱ *Suetonius*, *Vesp.* 5 *Tacitus*, *Hist.* VI 3
- ⑲ *Bell.* IV 601f.
- ⑳ *ibid.* V 114, 261 VI 94f. etc.
- ㉑ *Vita* 416
- ㉒ *Bell.* VI 430 なおタキトウスによれば籠城者の数は六〇万
- Hist.* V 13 神殿炎上については*Bell.* VI 236—270 この邦訳は秀村欣二氏により、世界歴史事典史料篇一四五以下
- ㉓ L. Friedländer, *Darstellung aus der Sittengeschichte Roms* 1920 III S. 50f.
- ㉔ *Amphitheatrum Flavium* フラウァウスの半円劇場と呼ばれる
- Suetonius*, *Vesp.* IX
- ㉕ Holscher, op. cit. S. 1938
- ㉖ *Vita* 422
- ㉗ *Bell.* I 3
- ㉘ *ibid.* I 4
- ㉙ トラヤヌス帝の時（一二五—一二七）エジプト、キュレネにおけるユダヤ人の叛乱、これに関連してメソポタミア地方における

ユダヤ人の蜂起、続いてハドリアヌス帝の時(132-135)明確にメシア運動の性格を示したバルコクバの大叛乱等。

F. Schürer, *Geschichte des jüdischen Volkes* 1s S. 661ff.

③Aplon 51

④Vita 429

⑤Suetonius, Dom. 20. このドミティアヌスの治世中見識ある文人タキトウスプリニウスは沈黙を守った Teufel, *Hist. of Rom. Literature* 1900 ii P. 102

⑥古代人の觀念において民族についても家族についても同じく *antiquit'* と *noblesse* はシノニムであった。T. Reinach, *Flavius Joseph* 1930 *Introd.* XV

⑦六世紀における最大の著述家とされる Cassiodorus はヨセフ

## 二、祭司貴族としてのヨセフオス

ヨセフオスの出自は彼自ら述べる如く、由緒ある正しい祭司の家であり、母方によってハスモン王家にもつながる名門であった。彼は若年にしてネロ宮廷に国民使節の如き資格を以て派遣された事はこの様な任命は大祭司級の人物を以てあてるのが例であった事から見てもその高貴なる出自を示している。上級の祭司貴族は衆議所に拠り、宗教面はいふ迄もなく、世俗的な面にわたって人民一般の統制にあたっていた。衆議所の起源は古く、その議長はイエエルサレム神殿の大祭司が兼ねるところで、この点に神裁政の要素を見出すことが出来る。大祭司は特定の高貴の家柄から出て、その地位は終身職でもあった。⑧神殿の擁する巨富については天下に広く知られ、ローマの野心家を誘惑するに

オスをそのユダヤ古記を主とする一連の著述の量の多いことから *Secundus Livius* として賞揚する。Schürer, op. cit. S. 95

⑨ヨセフオスの立場からは初代クリスト教徒の動きは到底理解し得ないところであるが、ユダヤ古記中にイエスに関する約一〇〇語の単文が見える。これはフラヴィウス証言 (*Testimonium Flavianum*) として知られるところである。

これがヨセフオスにオリジナルなのか、後の教会の手による挿入かについて激しい論争が交わされたことがある。これはクリスト教徒による挿入、少なくとも加筆がなされていることは明かで、これがなされた時期についても見当がつく。三枝義夫「基督時代」昭和七年、六六頁以下参照



充分な魅力をもっていた。この神殿を管理し、衆議所の議長を兼ねる大祭司の地位は政治的支配者の注視を免れなかったところで、既に早くからその終身職の原則は破られ、任免権も政治的権力のために奪われていた。ヘロデ王は既にその治世中五回にわたって大祭司の更迭を行っている。野心ある祭司貴族の有力者達はヘロデ王に結びついてその地位を買い取り、僧官シモニア売買の悪風は公然の秘密となっていた。ユダヤ属州化の後の任免権はローマ総督の掌握するところとなり、代々の総督は金品を代価に「小児がボールを弄ぶ如くに」大祭司の更迭を行った。ヘロデ王時代からユダヤ戦争開始の頃までの約一世紀間に大祭司の代ること二十八回に及ぶ頻般さであった。首尾よく任命されたにしてもその地位はより多くの金品を積む競争相手のためくつがえされるおそれがあり、その地位を確保するためには任命権者の歡心を失わざる様腐心しなければならなかった。

A.D. 六年ユダヤがローマの属州に改編された時ローマは徴税権や大祭司任免権、死刑宣告権の如き緊要なるかなめをおさえるのみで、これ以外の面においては衆議所に対し広汎なる自治を認め、ヘロデ王家時代長く形式のみの存在に過ぎなかった点が改められ、本来の姿に多少とも接近するものとなった。ユダヤのローマ属州化は一部のユダヤ人がアウグストゥスに対して行った請願⑦を契機として実現を見たが、この請願者の実体はヨセフオスの伝えるところは明瞭を欠いている。併し、これは祭司貴族の指導する上層階級の者とするべきであらう。ヘロデ王の後継者アルケラオスの統治下における名のみの独立に見切りをつけた上層者達は属州化の実現に伴い、衆議所に広汎な自治権を与えらるべきを見通していたとすることが出来る。ユダヤ上層階級の親ローマの傾向は既に遠く、かのハスモン王家時代から「平和と同盟」⑧の関係を確認し、近くはカエサルによって厚い保護を加えられ、これを徳とすること多大なものがあった。ともあれ、属州ユダヤの経営にあたり、ローマは徴税や治安維持のため総督を派遣し、軍隊を駐留せしめることとなり、徴税の準備として戸籍登録が行われた際、いきり立つ人民を時の大祭司一家がこれに応ずべきを力をつ

くして説得した。<sup>⑩</sup>それにも拘らず、かのガリラヤ人ユダの叛乱<sup>⑪</sup>が行われたのであった。駐留した兵力の一部はイエルサレム神殿を見下す場所にあつて干渉と威圧の体勢を示していた。この駐兵は民衆一般には呪わしき存在であつたことは云う迄もないが、祭司貴族においては国内の治安を維持し、秩序の保持を保証すべきこのローマ兵力は彼等の地位と利益を保護すべきたのもしい実力であつた。

大祭司を頂点とする祭司身分は神殿を擁し、家格上の差別による嚴重な階層組織を構成していた。その家柄の階層により祭祀を掌るものから、神殿の経理、財産の管理、神殿税の收支から神殿の警護等に至る万般の業務の分担が定つていた。祭司は上下の身分の差を問わず夫々の宗教的特権を享受していたが、上級の祭司貴族と下級祭司との間にはその特権において隔絶するものがあり、上級の祭司貴族は各種の特権を独占してその富強を誇つた。<sup>⑫</sup>地方の会堂に仕える地方祭司をのぞき、イエルサレム神殿に仕える祭司の数は二万にのぼり、これが更に二四の組に分れ、一組一週交代で日常の祭祀に従い、年数回の祝祭日にはこの全員が動員された。イエルサレムそのものが神殿によつてたつ一大消費都市であり、平生においても神殿の周辺は賑かな市場であつた。その平時二〇万位と推定される人口はその生活を何等かの形で神殿に負うていたのであつた。国内外のユダヤ人の参詣、巡礼する者の数は平常においても夥しいものがあつたが、祝祭日にはその数は数倍にふくれ、それらの滞在と神事のために消費する金額は莫大にのぼつたことゝ考えられる。神殿を中心とする市場は勿論、聖なる都全体が活気と雑踏につつまれたが、これら祝祭日に雲集した民衆と駐留するローマ軍の衝突は屢々見られたところである。神殿の周辺や神域には店舗は軒をならべ、神事に必要なる一切の物資が販売され、雀や鳩の如き小動物から、大は羊や牛の類に至るまで、要するに律法において極微の点まで規定されていた一切の必要なる物資がそこに準備され、献金を両替する店もあり、<sup>⑬</sup>万端揃つて足らざるはない有様であつた。これらの店舗は祭司貴族の直接経営になるものでないにしても色々な形でこれらを支配していた

のであり、必要あつて市場価格を統制するためには市場監督官を置いたり、要するに祭司貴族による市場の独占的体制がそこに見られた。しかも神殿への供物は結局その祭祀を担当する祭司達に与えられるのも律法に定めるところであり、これら神殿をめぐる消費経済の過程は云わば祭司のための一方的循環にほかならず、大祭司はこの様な神殿消費経済の支配の頂点を占めていた。

大祭司を出し得る如き最上層の祭司貴族は特に富裕にして権勢ある特定の数家に限られ、それらの間に大祭司の地位のたらいまわしが行われた感がある。ユダヤ戦争への突入の頃、大祭司を次々に出していたアナノス家はローマ出先勢力とは特に親交関係あつて、その信任を得ていたが、この一家は神域の市場に「アナノス店舗」と呼ばれた一連の売店を経営していたことが知られる。このアナノスは熱心党ゼーロダイの暴力の犠牲となつて最後をとげたが、一般からも悪評を以て迎えられていた人物である。特記すべきはこのアナノスに対してヨセフオスは最上級の讃辞を捧げていることである。この家を始めとする数家の上級祭司貴族の神殿をめぐる営利行為に結びついていた横暴さは一般ユダヤ民衆の呪咀のまゝとなつていたことはユダヤ教側の史料にもうかゞわれるところである。又この様な行為に対する反感は初代クリスト教徒においても見られ、かゝる営利行為は神殿を強盗の巣となすものとされ、この故にこそイエスの異常とも見られる行為がこれに関連して伝えられているのである。前記のアナノスの例に最よく見られる如くヨセフオスにおいては讃辞を呈している者、口汚い悪罵を浴せかけている者とそれらの間の対照がはっきり出て居り、特にこれらの条項は批判的に読まなければならないが、同時にそれはヨセフオスの意識従つてその立場を把握するためには参考になることが多い。

神殿に奉獻される供物はその種類において雑多を極めたにせよ、結局それは上番の祭司と大祭司の手に帰すべきものであった。その量は莫大にのぼつたにしてもその都度に完結する一回的性格をもつものであった。祭司の手に帰す

べき経常的な収入としては律法の規定するところによれば「十分の一税」<sup>(21)</sup>を挙げることが出来る。これは祭司の日常生活と祭儀の挙行のための費用として献ぐべきもので、祭司は各々割当地区の持分を所有していた。その対象とされる物資はあらゆる「地の産物」とされ、単に農産物にとどまらず、家畜一般にも適用された。元来は感謝と喜悦を以て献ぐべき任意性をもっていたにせよ、律法において規定された聖なる法である限り、祭司側よりすれば徴すべき正当なる権利であり、従って税としての強制権をも伴うことになるのである。次に神殿に入るべき経常的な財源として最大なものは、国内外のあらゆる成人ユダヤ人が毎年神殿に捧ぐべき半シケル（等量のギリシヤ貨幣においてはニドラクマ）の献金があった。これも律法において規定されたところで、国内外を問わず、各地方の中心に年一回この現金が集積され、その地の名望ある有力者がこれを保管し、嚴重なる護衛を以てイエルサレム神殿に護送されるのを常とした。祖国を遠く離れたディアスポラのユダヤ人もこの金額の納付を以てイエルサレム本山における祭儀に関与し得たのであり、ユダヤ教共同体の一員としてのつながりを絶ち切らぬための唯一の方法でもあった。これも本来は任意的なものであったにせよ、律法に規定されている限り、人頭税の性格をもって固定されるに至ったものと考えられる。この送金はローマ世界各地に散在するディアスポラのユダヤ人から毎年送り届けられたが、その途中の治安の行届かざる限り、甚だ危険の伴うものであった。それが又巨額にのぼったことも当然であるが、ローマ世界各地の地方官達は自己の管内から毎年まとまった金額がイエルサレムに向け流出することに対して神経をとがらせないわけにはいかなかった。<sup>(22)</sup>かつてユダヤ人に対して大幅な好意を示したカエサルは各地に散在するユダヤ人に特権を認めた中に、このイエルサレムへの送金について承認と保護を加えたこともあったが、その後はこれが続いて行われたとは考えられず、路上屢々海賊野盜のねらうところとなったり、時には悪徳地方官により没収のうき目にあうこともあった。<sup>(23)</sup>神殿はこれら各方面からの送金の安着を期するためには道中各地の有力者や出先のローマ地方官との連絡をよくし、その

ためには金品の投入もやむを得ない場合もあったであらう。

この人頭税の性格をもつ、云わゞ神殿税はすべて現金を以て収納される故に神殿における現金の蓄積には著しいものがあり、時にはその一部は土地や奴隷その他財宝類の神殿財産への投資に向けられた。その他、オリエント各地に例が見られた如く、利息を徴して金融活動をも行つたであらうことは直接的な史料を欠くが、充分考えられるところである。更に、個人財産の最も安全な保管のためには神殿に寄托する方法がとられ、ユダヤ戦争終末の頃神殿炎上の際同じく焼失した倉庫には個人寄托の夥しい財産が蔵されていた<sup>27</sup>。この神殿をめぐって動いた巨大な経済機構を支配するものこそ時の大祭司とこれを支える祭司貴族にほかならなかった。

祭司貴族のよりのむ神殿における供物、十分の一税や神殿税の収納は彼等のために律法において規定された特権であり、その宗教的特権の上に安坐し、甚だ富強であつた。異教的ヘレニズムの奔流がこのユダヤのヘブライズムの上に蔽いかゝつてから既に久しかったが、祭司貴族は早くからその恵まれた財力を以て開明したヘレニズムの現世的な享楽文化を享受し得た。彼等は富裕な上層市民とは利害関係や文化の共通点から接近し、屢々婚姻関係によつても結ばれ、これらによつてサドカイ派<sup>28</sup>という極めて現実的な社会勢力が形成されていた。祭司貴族は巨大な富をもつて天下に名を知られたイエルサレム神殿を独占的に管理し、種々の宗教的特権を握る一方には俗人たる一般民衆を指導すべき地位と責任にあつた。併し、種々の特権に安坐すること久しきに及んではユダヤ教本来のきびしい戒律を忘れ、職業的な祭儀の施行にとゞまり、安易にして浅薄な形式の端末のみを事とし、その實際生活は世俗的なものとなり、そこには宗教的生命は枯渇し、民衆の宗教的指導からは程遠く離れるものとなるに至つた。

祭司貴族はこれら宗教的特権がそこなわれるのを極度に恐れたのも当然であつた。而してこれら宗教的特権の安全は一にユダヤの社会的、政治的秩序の安定にかゝつていたし、この秩序の安定があつて始めて祭司の上下の階層組織

の維持も可能であり、その特権的地位に安住し得たのであった。彼等のかゝる特権的地位を安泰ならしめ、既存の秩序を变りなく維持する力こそ属州ユダヤに駐留するローマの冊冊力に代表されるローマ勢力にほかならなかったのである。彼等祭司貴族がローマの出先勢力に対して協力を惜しまない親交的態度は決して単なる弱者の強者に対する阿諛迎合という浮動したのではなく、実に彼等がその存在の保証を求めてやまない本質的要求に発していたのである。代々のローマ総督の中には時の地方官に有り勝ちな私慾と惡徳に終始した人物が多く、個人的には祭司貴族の期待を裏切ることもあったにせよ、ローマ勢力によって保証され、その限り安定を見ていた祭司貴族の地位とその独占していた宗教的特権はとにかくユダヤ戦争への突入の頃までは維持出来たのであった。併し、狂信的なメシア待望の期待に燃え、神意をもねぢまげんとする熱心党的暴力が支配するに及び、ローマ勢力は後退せざるを得ざるに至った。次いで親ローマ派の祭司貴族やその上に立つ大祭司級の人物は次々と血の肅情を受けては消されることゝなった。

かくて社会的政治的秩序は破れ、これに支られていた祭司の階層組織は根底から動揺せしめられ、従つて又祭司身分は分解作用を呈するに至るのもやむを得ぬところであつた。祭司身分はその上層と下層の間には特権や權勢において著しい相違があり、上下の統率や保護の關係を以て結ばれていたが、今や上下の統率關係は破れ、左右の紐帶はたち切られるに至つては各個に孤立した存在とならざるを得ない。彼等の依り頼んできた収入源も当然絶ち切られるに至る。祭司の生活の資たるべき十分の一税の收納も杜絶え勝ちになるのも当然であつたが、上級の祭司は實力を行使し、下役を農家の庭先に派して十分の一税を強奪し、納め得ぬ者には暴行を加える如き例も見られることゝなった。併し、この様な實力を欠く下級祭司はその持分の十分の一税は入らず、これを強奪する術もなく、窮迫して餓死をとげる者も現れる有様となつた。<sup>(2)</sup>

上級の祭司貴族はその存在の基盤がぐらつてははその身分層の解体は免れなかつた。殊にローマ勢力と直接結びつ

いていた大祭司級の人物が次々に肅清され、神殿は熱心党的叛徒に奪取され、又大祭司の任命を彼等が行うに及んではなすべき術もなく、その身分全体が壊滅せざるを得なくなった。その上神殿の炎上がかさなつては祭司貴族の運命はこゝに極つたのであった。彼等が最早ユダヤ教の担い手たゞざる事実がこゝでも実証されたのであった。ヨセフオスは早くもこのカタストロフから脱出し、祭司的ユダヤ教の粹をこえて自らを以てヘレニストユダヤ人の一典型たることを明示したのであった。かくの如くヨセフオスを見てくる場合、彼がその自伝において、「パリサイの信条に従つて生きることに<sup>⑪</sup>なつた」と記した一句を以て彼をパリサイの徒と規定する説には賛同することは出来ない。その一句が該当するのはその年少の頃の一時期に過ぎず、決してそれはその生涯を貫くものでないことは明かであらう。

## 〔註〕

- ① Bell. II 234ff.  
 ② ネヘミア記 12.10 等  
 ③ ローマ三頭政治家の一人クラッススはバルティア遠征の軍費と称し神殿より二千タラントの現金、八千タラントの価格の財宝を奪取した。(Bell. I 179ff. Ant. XIV 105ff.)  
 ④ 拙稿「ヘロデ王に関する一考察」人文社会第九号(一九五六年)六三頁  
 ⑤ 総督たちから大祭司職を金を買って買い取り、毎年の如く代つた。Klausner, Jesus of Nazareth 1925 P.163  
 ⑥ Ant. XX  
 ⑦ Bell. II 80, 111 前掲拙稿五二頁  
 ⑧ マカベア第一 8.20  
 ⑨ カエサルを始めローマ元老院によつて認められたユダヤ人の特權として信教の自由 (Ant. XIV 260 XIX 305f.) 旧慣遵守の自由 (Ant. XIV 264) 国外ユダヤ人の神殿への送金許可 (Ant. XIV 106f.) 等々。これらの条項はカピトリウムの円柱に刻されて居り……我等のローマとの關係を疑う者は道理を弁えず (Ant. XIV 266) とヨセフオスは云う。  
 ⑩ Ant. XV 2f.  
 ⑪ 前掲拙稿「熱心党をめぐる二三の問題」においてユダヤの叛乱の本質に吟味を加えた。  
 ⑫ 神域北隅に神殿警護のバリスの塔あり、これは大祭司の儀式用の僧服、聖器等を所蔵、ヘロデ王はこれを修築しかつてのペترونアントニウスの名をとりアントニア塔と名づく (Bell. I 401) ローマ風州化と共にこれはローマ軍の居住するところとなり、僧服、聖器の保管はローマ側が行ない、使

用の節はその許可を要することとなる Ant. XV 392f.

ここに常駐した兵力は一大隊<sup>ユダヤ</sup> Bell. V 244 行伝 183<sup>1</sup>

⑬ Apion 2<sup>9</sup>

⑭ レビ記、申命記等に微細にわたって示された供え物の規定がある。その要約は例えば杉田六一「ユダヤ革命」昭和三十三年一三三頁以下参照

⑮ マタイ 21<sup>12</sup> マルコ 11<sup>15</sup>

⑯ Agardenis or Agroninos. Ffersheim, Life and Times of Jesus the Messiah 1898 vol. I P. 117

⑰ Bell. IV 314f.

⑱ Edersheim, op. cit. P. 371

⑲ Bell. IV 315

⑳ 前註 ⑮ 参照

㉑ 創世紀 14<sup>20</sup> 28<sup>22</sup> 申命記 14<sup>22</sup> レビ記 27<sup>32</sup> 歴代志下 31<sup>5</sup> 等

㉒ 出エジプト記 30<sup>13</sup> マタイ伝 17<sup>24</sup>

㉓ ユダヤ人嫌いのキケロの語として次の一例をあげる。「ユダ

### 三、ヨセフオスにおける演説様式

ヨセフオスはギリシヤ語を以てその著作をなすにあたり、古典ギリシヤ文学に精通した助手の援助を得て居り、その執筆になる部分も相当量にのぼることはヨセフオス学者の指摘するところである。<sup>①</sup>彼の時代のローマ文人間の風潮としてギリシヤ文学、特にトキュデーデースの格調正しい叙述が模範とされ、その語句の下手な模倣が一般に流行していた。<sup>②</sup>ヨセフオスも亦この風にならったが、その他に広く古典ギリシヤの作品からの影響も見られる。トキュデー

ヤ人の金がイエルサレムに送られるべく年々イタリヤ及びすべての属州から流出する、フラックスよ、びた一文もアジア地方より送るべからず」Cicero, Pro Flacco 28

②④ 前註 ⑤

②⑤ ミトリダテスはコス島においてイエルサレム神殿に送らるべき八〇〇タラントを没収した (Ant. XIV 113)

②⑥ M. Rostovtzeff, The social and economic History of the hellenistic world 1953 P. 1282

②⑦ Bell. V 282

②⑧ G.F. Moore, Judaism 1946 Vol I P. 70

②⑨ Ant. XX 180f. 200f.

②⑩ Bell. IV 155 素性いやしきフニナスなる者をくじで選んできめた。此者は大祭司の何たるかも弁えざる者であったとヨセフオスは云う。

②⑪ Vita 12

②⑫ Holscher, op. cit. S. 1936



デースはその著作中に現れる重要人物をして演説を語らしめ、叙述に迫真力を与えて効果をあげている。この手法は多かれ少かれ古代史家の間に一般に見られるところで、手近かなところではヨセフオスがその再来と称せられたかのリウィウスが然りであり、又福音書記者中にある歴史家を以て自己共に許したルカ<sup>③</sup>においてもこの手法が愛用されている。ヨセフオスが時の一般的風潮に従って演説様式を盛んに用いているのも不思議はない。但し、トキュデーデースがこの様式を用うるにあたっては、やゝもすれば演説の内容が筆者の恣意な創作に流れる危険性がある事について慎重なる反省がなされて居り、従つてその作中の演説の内容については事実と信じてよいとされる。併し、ヨセフオスにおいては、彼の著作全体を通して自己弁護の傾向が強く見られる如く、彼が好んで用いた演説様式においても作中の重要人物の行う演説に仮託し、その口をかりて彼自身の思想なり立場なりの表白を行つて居り、この点トキュデーデースを学んで遠く及ばざるものとせざるを得ない。この一例として前記のアグリッパ演説があげられる。今こゝにアグリッパ演説にあわせて、彼自身が行つたとされる数ヶの演説の中で最も集約的にその立場が述べられているイエルサレム城内に対して行つた降伏勧告演説をとりあげて吟味を加えることにしたい。

ユダヤ戦争への突入を促進せしめるに一役演じた人物としてローマ総督フロルスがあげられるが、彼の露骨な挑発行為によつてイエルサレムの市民達は熱心党的勢力の指導の下にいきり立つていた。これを前にしてアグリッパによる宥和説得の大演説<sup>④</sup>が行われることになる。彼はヘロデ王家につながり、時の俗人としての親ローマ派を代表する者であり、ヨセフオスとはその生涯を通じて親交の深い人物でもあった。このアグリッパ演説は二千数百語に及ぶ長大な大雄弁であるが、次にその内容を摘要してみる。

「……………抗戦にうかされた者達はまだ若年で戦争の恐怖について知るところはない……………我こゝに汝等によしと信ずる方策について告げねばならぬ。……汝等は権力をもった者には従わねばならぬ。……仮にローマ総督が汝等に害を

加えたにせよそれはローマ人全体ではなく、……カイサルでもない……同一の総督が永久に続くべきものでもない。  
 ……戦争にして一度始められんかやめること難く、それより生ずる災害を免れることは出来ぬ。自由回復の願も今からでは既に遅いのである。……始めポンペイウスがこの国に来った時、汝等の父祖や王達は汝等より実力において優りながらローマの小部隊さえもおさえ得なかつたのである。……かのアテナイ人……ラケダイモン人も甘んじてローマを主として仕えている。かのアレクサンドロスの偉大さを偲びつゝもマケドニア人は……幸運の座についた者に服従を献げている。……汝等は全世界が服している者に臣従するを恥とする地上唯一の民なるか。……汝等の頼みとする船隊、財貨はいづくにあるか。……世界広しと雖もローマ人の野心をみたすに足りず……ユウフラテスを東方の境界とするに安んぜず……イステルも北の境界にあらず、南はりビュアをこえて無人の地に達し、西の方はガデイスに至る。……以前知られざりしブレタニアに大洋をこえて渡り……。これに対して汝等のたのむところは如何、ガリア人より富むか、ゲルマニア人より強きか、ギリシヤ人より賢きか、日の下あらゆる民にもまして聰明とされるギリシヤ人も……ローマの大束の檣票ラブドイに服している。マケドニア人も同じ、更にアジアの五百の都市は如何、これは軍隊の駐留なしに唯一人の総督に服している。……黒海沿いの各民族は今や三千の軍隊に服し、かつて航すべからざりし荒海を四十の船隊を以て守備している。……アジアにおける各民族はいかに強く自由を要求したか。……併し、彼等は武力の行使をまたず貢納している。……トラキア人は……二千のローマ軍に服し、隣接のイリュリア人は……二ヶ軍団により統御されている。ダルマティア人は……今や一ヶ軍団の下に平静を保っている。……かのガリア人は……全世界にもまして豊饒なる物資に恵まれながら……ローマへの貢納に甘んじている……これ彼等の精神弱き為ではなく……ローマの偉大なる技能より生ずる力と幸運に対する尊敬の念に発す。これらガリア人は一万二千のローマ軍に服している。……ローマ人は更に軍をかのヘラクレスの柱まで進め……所在の者達の征服を行った。……而してこれを

守るには一軍団を以て足れりとなしている。……かのゲルマニア人は、……その数夥しく……広大なる土地をもち……その精神はその肉体にまして強く、……レヌス河その境界をなし……彼等は八ヶ軍団により征服されている。……イエルサレム城壁をたのみとする者達よ、かのブレタニア人の城壁の堅固さを思え……彼等を四ヶ軍団を以て守っている。……かのパルティアは精銳を誇る軍をもちながら……ローマに人質を送っている。日の下あらゆる国の民服し居る時汝等は敢て挑戦する唯一の民なるか。……かのカルタゴ……ヌミディア……これらの国の民はローマ人を八ヶ月養うに足る物資を産し……あらゆる種類の貢納を献げ……彼等の間に一軍団が駐するのみ。ローマ權勢のしるしは手近かのエジプトにおいて見られるところ……その人口はアレクサンドリアをのぞいて七百五十万……ローマの支配に服するを恥とせず……アレクサンドリアは……汝等の一年分の貢税はその一月分に過ぎず……ローマにその四ヶ月分の穀物を送る……この都市に二ヶ軍団駐して誇高き貴族を制している。……汝等の望み得べき援軍は奈辺よりか……無人の地に求むか。全世界はローマ人のものではないか……ユウフラテスの彼方アデアベネの同族よりか……パルティア人はこれを許さぬであらう。汝等に残されたるは神よりの援助のみ、併しこれさえローマ人側にくみし給うている。そは神助なくてかゝる広大なる統治は実現し得ぬであらうから。……戦をなす時は小敵なりとも律法を破らざることのいかに難きかを思え。……神助をたのみとするその望をつなぐ律法を犯すに至れば神汝等を去り給うであらう……安息日を守ってその日戦をなさざれば容易に破れ去るであらう。……汝等戦によって得んとするその目的は何か。汝等の願うところはたゞ父祖よりの制度を保全するにあるのではないか……戦をなすには人よりか、神よりかいづれかの助をたのまねばならぬ、……もし戦に走らんか、これらいつれの助をもたち切るにほかならず、……その先にたゞ滅びあるのみ……ローマ人勝利の際には汝等を寛大にあしらうとは考えられず……汝等の聖なる都を焼き払い全国民を壊滅せしめるであらう。……生存者も逃亡する先なく……他国に住む同胞に累が及ぶであらう。少数の愚も

か者のためあらゆる都市にユダヤ人の血が流されるであらう……汝等の都……至聖所に思いを致せ……神殿の保全を期せ……汝等行動を誤るなかれ……されば平安汝等と而して我等の上にあらう……。」

次にヨセフオスが自ら行ったとするいくつかの演説のうち最も代表的なものの一つについて見ると、これは戦争もいよゝ末期的現象を呈して来た頃のものである。イエルサレム城内に籠城した抗戦派は第一、第二の城壁が突破され残すところは神殿と高地あるのみとなった。ローマ軍司令官ティトスはいかにもしてこの都と神殿とを壊滅から救はんものと、ヨセフオスをして籠城する同胞に対して降伏勧告を行わしめたが、その時の演説<sup>⑥</sup>が即ちこれである。かくてヨセフオスは最後の城壁に接近して次の如き内容の呼びかけを行った。

「祖国と神殿を救え、異邦人すらこれに熱意を示しているのに汝等これを考えないのは何事であるか。……ローマ人は自らに關係はないが、なおかつ敵の神殿を尊重す。……ローマ人の勢力は抗し難きものあり、これに服従するは今が始めにあらず……。かりに自由を求めて戦うを高貴なりとせばローマと戦うはその当初においてなすべきであつた……幸運は幾變遷の末今やローマ人の許にとどまる。……人間にありても禽獸にありても強者に服するはこれ鉄則である。……汝等の祖先はあらゆる点に汝等にまさりながらもローマ人に服従した。機会去らぬうちにこの勧告に従え。……ローマ人は汝等最後まで従順ならざる場合のほかは汝等の既往の行為は問わない……。カイサルは武力を以てこの都を占領せんか、差出されたる手を拒んだ後は一人残さず容赦しないであらう。……仮に汝等の守備は破り難しとしても飢餓はローマに代りて汝等と戦うであらう。」

この勧告がなされると城内からは嘲笑、憎悪、矢の投射を以て答えられた。説得が容れられないのを見てヨセフオスは彼等の歴史を引照して次の説得を続けた。

「汝等はローマ人と戦うに武器と腕力を以てせんとするが、このような手段を以て他の敵を今迄に破ったことがある

か……。汝等がローマ人と戦うは神に対して戦を挑むにひとしきことに思を致せ。……我等の祖エジプトを出でし時も武器によらず、すべてを神に依頼した……。汝等はいかのバビロンにおける七十年の隸従を知らないのか……。総じて武器に依つて成功をおさめた例はない。……かのゼデキア王は預言者イエレミヤの忠言を容れず……。かのバビロンの王と戦い……。彼自身捕れの身となり、町と神殿は壊滅せしめられた。……我等の父祖がかのアンティオコスに対して武器をとった時、彼はこの町を包囲し、神威をいたく傷けた……。彼等は戦に破れ、町は掠められ、至聖所は三年六ヶ月にわたり荒廢に歸した。……かくて我が国の民は武器を所持するのは許されたことがなかったのである。今や神殿は汝等の巢窟と化し、ローマ人さえ遠くより尊崇するこの神域は国人によつて汚されつゝあるのだ……。ローマ人は我等の父祖のなした如き貢税を要求するのみで、これさえ得られれば、都を掠めることなく、至聖所に手をふれることなく汝等の家族の自由や財物を安堵し、律法を保護するであらう。……神は正しき者も邪惡なる者もひとしくよしと見給うと考えるは狂氣の沙汰である。……されば神は我等が自由にふさわしく、ローマ人が懲罰に値すると見給えば、即座にその如くなし給うであらう。……併し、余は信ず、神今やこの至聖所をのがれ給ひ、汝等が敵対する者の側にありと。……されど汝等もし望むならば救いの途はまだ残されざるわけではない。……悔い改めよ。……心頑なる者達よ、武器を捨てよ。……正に壊滅せんとする祖国を憐れめ。汝等のそむきつゝあるこの都、この神殿に目をそゝげ。……汝等の家族、子や妻、両親は長く飢餓に悩んでいる……。」

以上二つの代表的な演説の内容を要約したが、これらの演説はこのまゝの形でなされたとは到底考えられない。アグリツパはこの内容にある如き時のローマ世界各地の情況、特に各屬州におけるローマ軍の配置等について一大パノラマを展開しているが、これだけの知識なり資料なりを持ち合せていたとは考えられない。かりに有和説得の演説がなされたにしてもこの様な内容をもって行われたとすることは出来ない。その内容の個々について仔細に検討すると

この演説がなされたネロ時代的情勢よりもむしろ後のウエスパシアヌス帝時代のそれを伝えて点が見られるのである。かくてこれはヨセフオスが著作を行うにあたって机上において製作された事を証するものとしなければならぬ。事実ヨセフオスはフラウイウス王家の庇護の下に政府の公文書を利用する事が出来る立場にあった。ヨセフオス自身が行ったとする演説もよく調べられ、周到なる準備をもってなされたものであることがわかる。

両演説を通じてヨセフオスの属した祭司貴族の立場が集約的に表白されていることがわかるのである。何よりも彼等の律法において保証された宗教的特権はローマ勢力によって安全が保たれていたこと。而してそれが神殿という具體的存在によって支えられていることが強く主張されているのである。彼等においては現実の世界に秩序を与えるのに服することが過去の伝統を保存する唯一の途であり、現実の力である政治と過去につながる伝統的宗教とを相互に次元を異にする別物として切り離すことが出来た。これこそ熱心党的狂信者には到底理解し得ざるところであった。

祭司貴族においてはローマ勢力に支えられる現状維持のみがその本質的要求であった。而してこのローマに反抗することの無意味なることを世界の現況、而して又彼等の歴史の教訓によって実証せんとしたのであった。祭司貴族の立場においてはユダヤ戦争というデスベレートな抵抗を支える狂信的メシア思想にはいさゝかの理解も同感も持つことは出来なかつた。熱心党的狂信者は選民意識の上に立ったメシア待望の信仰を堅持するあまり、メシア出現の終末的緊迫のうちに武器をとって起ち上る時、神メシアを遣して我等を助け給わざることなしと信じこんだのであった。この様な狂信は民族的危機に際しては燃え上るのを例としたが、かのユダヤのローマ属州化が行われた時にこの様な熱心党的原型が見られ、以後如何なる弾圧にも堪えて次第にそれは累積され、時に応じて散発を見ては深刻化してゆくのみで、その最後の爆発としてかのユダヤ戦争を見るのである。ヨセフオスの立場においてはこの次第に累積を見て行つた熱心党的叛乱の中に祖国の滅亡と神殿の壊滅、従つて祭司貴族を含めた総体的崩壊への突入の因子を予見出来

たのであり、それらの中に悪しきもの以外に何物をも認め得ず、これらに匪賊<sup>⑧</sup>、叛乱<sup>⑨</sup>、欺瞞者<sup>⑩</sup>、偽預言者<sup>⑪</sup>、妖術家等<sup>⑫</sup>という仮借ない悪罵を浴せかけているのである。祭司貴族の存立を根底からくつがえさんとするこの種の運動に対してこの様な見方以外には出来なかつたのであつた。

誠に彼はローマの世界支配という現実の抜くべからざる客観情勢に通じた時のユダヤの開明した知識人の代表であり、その身分は祭司貴族に属した。祭司貴族は既成の特権身分に安住し、父祖以来の律法と神殿の護持にその存在の基盤をもっていた。而してその保全は時の世俗的権力、たとえそれは異邦人のそれであれ、それとの結びつきによってのみ可能であつたのである。それに対する奉仕と協力、それから受ける庇護によって現状が維持されることが何よりの要請であつた。現実のローマ権力を神の名において承認し、ローマ皇帝のための神殿における特別の祭儀さえも準備し、進んでローマの属州化をのぞみ、ローマ勢力に協力と奉仕を惜しまなかつたのはそれによって彼等祭司貴族の存立を期し得たが故にほかならぬ。

ヨセフオスが対決せんとした熱心党勢力においてはローマによる異邦人支配は到底承認し得ぬところで、彼等はこのローマ勢力にあわせてこれと堅く結びついた祭司貴族を中心とする特権的階層の打倒に狂奔した。而してこれはメシア待望の狂熱的暴力によって推進されたのであつた。ヨセフオスはこの熱心党的暴力を前にして一身上の危険を恐れ、それとの妥協に一時を糊塗したが、その機会主義的にして便宜的な行動は当然に時のユダヤ人からは攻撃を招いたのであつた。これに対して著作中において自己弁護を行い、それを正当化せんとしたが、その故にこそ幾多の矛盾と曖昧点を残さざるを得なかつた。又祖国と民族の危機にのぞんで行つた自己疎外の行動はその動機はいかにもあれ無関係の局外者をしても決して共感を覚えしむる如きものではない。ともあれ、「彼の著書は批判し得るが、無視は出来ない<sup>⑬</sup>」のであり、それどころかユダヤ民族史のみならず、原始キリスト教時代の背景を照らすサイドライトとし

て真に貴重なる史料となつて居り、聖書と共に永遠性を主張し得るものとしなければならぬ。併し、それにしても彼の本質的立場が吟味され、その著作の動機が明かにされ、従つて又著書のふくむ傾向性が正しく把握されることが必要である。要するに当然のことながら批判的に扱われることが史料として駆使されるための必要なる前提となるのであり、この点が再確認されねばならぬ。

〔註〕

- ① J. Thackeray, *Josephus, the man and the historian* 1929, P. 100ff.
- ② *Cicero, Orator IX30 in Thackeray P. 110*
- ③ ルカ伝 23 ルカはその著作ルカ伝、使徒行伝をローマにおいて書いたことは確実であり、その時期もヨセフオスと平行している。但しヨセフオスとルカの出合いについては確証はない。

あとがき

ヨセフオスの一連の著書を史料としてクリスト教の起源と成立の背景をあとづけんとしている筆者の前に常にヨセフオス「それ自体」が大きな問題として立ちふさがっている。ヨセフオスそれ自体を扱っている文献は多いわけではないが、その中で教えられるところ多かった文献は註においてあげている如きものである。特にユダヤ教側史料は殆どこれら文献に負っている。併し、本稿においてはこれら文献によって教えられるところよりも直接ヨセフオスにた

- ④ 原随園「ギリシヤ史研究」第一昭和一七年一二六頁以下
- ⑤ Bell, II 345—401
- ⑥ *ibid.* V 362—419
- ⑦ C.A.H. vol. X P. 776
- ⑧ Bell, II 264
- ⑨ *ibid.* II 260
- ⑩ *ibid.* II 258
- ⑪ *ibid.* II 261
- ⑫ Ant. XX37
- ⑬ F. Jackson, *Josephus and the Jews 1930* introd. XVI



ちむかつて得たところをまとめたものが主となっている。それにしても筆者の力としてはヨセフオスの端末にふれ得たにとどまり、これをしていよく大きなエニグマたらしめた感が深い。機を得て問題を発展せしめたく願う。試論と題した所以である。

邦語による関係文献は筆者の知る限り、極めて少ない。古くは野々村成三「基督教史の研究」(大正九年)に「ヨセフオス記録考」なる紹介的解説があり、三枝義夫「基督時代」(昭和七年)にはヨセフオスに関する簡潔な記述がある。高橋虔「フィロンとヨセフオス」基督教研究二六巻四号(昭和二十八年)には関係文献を網羅したリストをのせている。筆者が全くふれるところなかったユダヤ戦争の経過は杉田六一「ユダヤ革命」(昭和三十三年)に詳細に展開されている。これら先学諸氏の業績には心からの敬意を表したい。

(昭三四、師走)